妹は大和撫子

matiko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妹は大和撫子

【Ｎコード】

Ｎ３２２３Ｚ

【作者名】

ｍａｔｉｋｏ

【あらすじ】

双子の妹は学園のアイドルだ。そんな妹の想い人はおとなしい子が好きらしい。頑張る妹を過保護気味に見守っていく姉の物語。

聡里と悠里

きっかけは憎きあいつのあの一言だった。
澤井敬介。
「敬介はどんな子がタイプなの？」
「しいて言うならおしとやかな子」

その言葉の通りに神崎悠里はおしとやかな、道行く男が振り返るような女の子になった。肩までのストレートだった黒髪は一年経った今では腰の辺りまで伸びている。手入れのされているその髪は艶やかでいつも近くで見慣れている私でも思わず触れたくなる。うっすら化粧をした頬は桃色。外見だけではない。悠里は心の優しい女の子だ。断言する。悠里に迫られて惚れない男はいないだろう。
悠里の双子の姉である私も悠里の変化を喜んだし（何より悠里は化粧やオシャレその他いろいろなことに興味がなかった）悠里の恋を応援した。
「ねえ、聡里ちゃん。なんでこんなに頑張ってるのに敬介くんは私のこと見てくれないのかな」
学校からの帰り道。たいてい私は悠里と一緒に帰る。そうでない

とこの子がどこの馬の骨に手を出されるかたまったもんじゃないから。ほら、今だってため息を悩ましげについた悠里をすれ違う男の人たちが見てる。こーのロリコン共め！

「ねえ、悠里」

「あ、聡里ちゃん。『澤井なんてやめときなよ』は聞けないからね」

「…どこがいいんだか、あんなやつ」

「あんなやつって言わないの」

悠里は澤井敬介馬鹿だ。私からすればどこがいいのかまったくわからない澤井敬介に妹は心を奪われている。かれこれ一年以上も前から。

澤井敬介について私が知っていることと言えば――なんだろ。

そう。不思議でしょうがないのだけれど、学園のアイドルである悠里の思い人は特筆すべきことが何もないくらい普通なのだ。

顔は十人並。少し整っているかな、くらい。少なくともやつより顔がいい男は学園中にごろごろいる。スタイルもこれまた普通。細身で、筋肉はあんましないように見える。頭はまぁ良いようで、悔しいことに私はやつに毎回テストで勝てないでいる。（いいもん。テストは人と競うものでもないし！）

不思議に思った私が悠里にどうして澤井のことが好きなのか尋ねると「敬介くんは優しいんだよ」と満面の笑みで返された。

優しい、って。そんな答えをする悠里を心配してなにが悪いのだろうか。確かに優しい人はいいと思う。でも優しさは数字で測ることのできないものだ。何が普通で何が異常なのか判断できないものに一生をかけるなんて真似を妹にさせるわけにはいかない。優しいと思ってた人が実は腹黒でした、とか暴力振るうような人でした、とかホストでした、とか――あああ悠里、後生だから恋なんてしな

いで。悠里が傷つくところを見たくない。
せめて悠里と一緒になる人は私の認めた人じゃないと。

神崎聡里。妹馬鹿です。

はじめまして。私は神崎悠里。神崎聡里の妹です。
聡里ちゃんはね、私の自慢のお姉さん。頭も良くて、運動もできる。言いたいこともはっきり言うことができるし、いつでも冷静。みんなに頼られているところを見ると私まで嬉しくなる。自慢のお姉さんだ。

そんな聡里ちゃんにも悩みごとがあるみたい。

「聡里ちゃん、何か心配事でもあるの？」
「え！　う、ううんなんでもないよ。悠里は何も気にしなくていいからね」
「うーん、聡里ちゃんがそう言うなら…」
「悠里。男の人は狼なんだよ。気を付けてね！」

男の人は狼なんだって。聡里ちゃん曰く。

聡里と悠里　2

澤井敬介を好きになってから悠里は可愛くなった。もとから可愛かったんだけど更に可愛くなった。
恋する女の子は綺麗に変わる、と悔しいけれど実感してしまった。

「聡里ちゃん、どこか変なとこない？　大丈夫？」
「そんな何度も鏡見なくても悠里は可愛いからだいじょーぶ」
「もう！　聡里ちゃん、私は真剣に聞いてるのにー」
「…変なところもないし完璧だよ」
「ありがとう、聡里ちゃん！」

私は朝の準備に時間をあまりかけない方だ。最低限で済ませてニュースをぼーっと眺める。反対に悠里は一時間以上は準備に時間がかかる。悠里に妥協という言葉はないらしい。

「今日も敬介くんに会えますように」

家を出ていく間際、玄関で見送りをしてくれるお母さんに聞えないように悠里は呟いた。
何の信憑性も根拠もない悠里のおまじない。

私たちの通う学園は中高大の一貫教育を売りにしていて、かくいう私たちもお受験組で中等部から学園に通っている。ほとんどの学生が内部進学し、外部からの受験は学年が上がるごとにそれなりに偏差値が必要となっていくため毎年少数である。

中等部と高等部の校舎は隣接していて、両者の間に位置している図書館は中高共通の建物である。中等部１０００人、高等部１５００人を超えるマンモス校なだけあって学園は広い。中等部は普通の学校と変わらない規模だと思うけど、高等部はちょっとした大学くらいの大きさだと思う。文系、理系、語学系と2年からコースに分かれる。成績優秀なものは特別進学コース（略して特進）を希望することができる。

悠里は文系。私は特進だ。

「聡里ちゃん、お昼にそっち向かうね」

「りょーかい。じゃ、またお昼にね」

文系、理系、語学系は校舎がA棟、B棟、C棟と分かれている。特進は成績上位1～2％のものだけの1クラスだけなので決まった棟はない。A棟の最上階5階に特別あつらえの教室がある。5階には特進専用のパソコンルームと自習室、リラックスルーム、学生課などがある。5階に出入りすることは全学生が可能だが、特進専用の施設は学生証のICチップが必要となるため利用不可だ。

「あーあ、私も特進だったらなぁ」

悠里の想い人、澤井敬介も特進である。悠里、こっちを見ないで。そんな涙目で私を見られても代わってらんないから！

「特進のリボン、してみる？」

「え、いいの！？」

学園のブレザーは女子はリボン、男子はネクタイと小物が付いてくる。この小物にも学園は手を抜かないらしくコースによって色が違うのだ。文系である悠里の胸元にあるリボンは赤。理系は青。語学系は黄。そして特進である私は白。女子は細目のリボンで、男子はそれぞれの色と黒とベージュのチェック柄だ。

「ありがとう、聡里ちゃん」
「こんなことでよければいつでも」

特進気分を味わったのか、悠里はご機嫌だ。笑顔もいつもより2割増しで輝いてる気がする。恋する乙女だなぁ。
悠里のクラスは2年C組。なので2階。ここでお昼休みまでお別れだ。手を振って階段上がろうとしたとき、悠里が私の手を掴んだ。どうかしたのかな、と思い振り返る。瞬間、悠里が私を呼び止めた意味がわかった。

「敬介くん、お、おはよう！」

声が震えてる。でも笑顔は完璧だよ、悠里。悠里の笑顔に周りにいた男の子たちが呆ける。

「おはよう。神崎さん、神崎聡里さん」

またまた神崎悠里です。なかなか髪の毛がうまくまとまらなくて苦戦中です。

「悠里ー！　まーだー？」

ああ、聡里ちゃんごめんね。でもでも、ここで諦めちゃ女の子失格になっちゃう気がする！　――ので、もうちょっとだけ頑張る。時計を見ると8時ちょうど。あと5分で家を出る時間。

「おまたせ、聡里ちゃん。ごめんね！」
「ううん、いいよ。まだ間に合うしね」

そう言って聡里ちゃんはにっこり笑ってくれた。
お化粧はちょっとしてるみたいだけど時間をかけない聡里ちゃん。聡里ちゃんの髪は肩くらいで切りそろえられている。色は私と同じ天然の黒。面倒だから、と自分を飾らない聡里ちゃんは自然で、聡里ちゃんの雰囲気にすっごくあってるから色々手間をかけてる私は少しうらやましい。

「聡里ちゃん、ここはねてるよ」
「え、嘘！　…まぁ、寝癖くらいならいいや」
「よくないよ、聡里ちゃん…」

お姉さん、もう少し身だしなみを気にしましょう。

優しい切っ先

「おはよう。神崎さん、神崎聡里さん」

悠里が声まで、手まで震えているというのに目の前の澤井敬介は悠里をなんとも思ってないようで少し微笑んだだけ。で、通りすぎようとする。

――悠里に近寄る男は許せないけど、悠里を何とも思わない男もむかつく。

矛盾しているけどまさしく私の心情としてはそうだ。姉として悠里を守ってあげたいけど、悠里の魅力に気づかない鈍感男なんて滅んでしまえばいい。

「いいの、悠里？　あいつ行っちゃうよ？」

「うん。挨拶だけで、敬介くんが私を見てくれただけで満足」

「――馬鹿。泣きそうな顔でそんなこと言わないの」

5階へと向かう澤井をただ見つめるだけの悠里はもう涙が溢れそうだ。決壊寸前。それでも悠里は嬉しいと笑うのだ。その言葉は本当だとは思うけど、やっぱり澤井が振り向いてくれないことは悲しいはず。

「聡里ちゃん。私は大丈夫だよ」

恋する女の子はどうしてこんなにも弱く、強いのかな。

澤井敬介。目下、私の大嫌いなやつだ。

「…神崎さん。俺に何か用事？」

「気にしないで。私のことは空気だと思って」

「無理だよ」

どうして悠里は澤井を好きになったんだろう。休み時間にぼーっと眺めてみるけど分からない。悠里は何故か私にその理由を詳しくは教えてくれないし。

「澤井は悠里のこと迷惑してるの？」

「迷惑ではないよ。神崎さんみたいな子に好かれるのは嬉しいし」

「ならどうして」

口に出してしまったけど、答えはわかってる。認めたくないだけだ。ライクとラブは違う。つまりはそういうこと。

「――澤井のそういうとこ、嫌い」

中途半端な優しさはきっと悠里を傷つける。それを理解しているからこそ澤井は悠里から距離を置く。悠里に理解させるために。

――澤井は正しい。その正しさまでをも知ってる悠里は間違っているのだろうか。

「ごめん」
「ほらまたそこで謝る。謝られると何も言えなくなるからやめて」
「ごめん。神崎さんの気を悪くしちゃったね」
「だから！」

真っ直ぐに、私の目から視線を逸らさない。「ごめん」と澤井が口にするたびにイライラする。いつもは吐かないような暴言も澤井相手だとストッパーがきかずにぽんぽんと口をついて出る。どっからどう見ても悪いのは私なのに、どうして澤井は責めないのだろう。何も言わないんだろう。

私は2回目の蓋をする。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3223z/

妹は大和撫子

2011年12月21日00時45分発行